

第二章「沈清クツ」と本地物語「竹生島の本地」は、一、本解の「沈清クツ」の伝承地域 二、「沈清伝」の研究史 三、「沈清伝」の諸伝承 四、本解「沈清クツ」と本地物語「竹生島の本地」の異同 五、本解の「沈清クツ」諸伝承本と本地物語「竹生島の本地」諸伝本の伝承関係の諸節から成っている。

考察の結果、著者は韓国の「沈清クツ」諸伝承と日本の「竹生島の本地」諸伝本は両国の民族・文化・伝承世界の相違によって異なった作品を構築しながらも、その始原において一致するものである。韓国の本系「沈清伝」はより古態を含み、始原の説話に近接している。その成立は室町時代末期（一五〇〇年代）以前までさかのぼることができ、その原拠は古い本解であったことが想定される。それはそのモチーフ構成において『さよひめ』および説経「松浦長者」にきわめて近似している。また本解の「沈清クツ」の場合、父の目の平癒が主題であり、沈清と沈盲人はともに目の神として祀られているが、日本の諸伝承の中で、目の問題について一番こだわっているテキストは『さよひめ』および説経「松浦長者」であり、最古態を留めているという。著者は兵藤裕己氏が「松浦長者」の伝

播者は、韓半島と九州およびその間をつなぐ 濟州島、対馬、老岐の盲僧・盲現なのであるうか、と日韓巫俗レベルでの密接な交流を想定していることを紹介しているが、自らはそれ以上踏み込まず、今後の課題として両者がどのような伝承関係でその一致が生じるに至ったのか、その直接的関係が明らかにされなければならぬだろうと指摘するにとどまっている。

第三章本解「ソニンムクツ」と「牛頭天王縁起」は、一、本解「ソニンムクツ」の伝承 二、本解「ソニンムクツ」の諸本の異同 三、（本解「ソニンムクツ」の古伝と見られる疫神にまつわる）「処容郎望海寺縁起」と本解「ソニンムクツ」 四、本解「ソニンムクツ」と「牛頭天王縁起」 五、本解「ソニンムクツ」と「牛頭天王縁起」諸伝本の諸節から成っている。考察の結果、韓国の東海地域に巫覡の祭文として伝承されている本解「ソニンムクツ」（A型）と「牛頭天王縁起」諸伝本は同系統の説話であり、両者はその叙述、モチーフ構成のみならずそれを支えている伝承の背景においても、きわめて近い関係にあることが認められるという。両者はどのような伝承関係でその一致が生じたのかについて具

体的に実証することは困難であるが、松前健氏の説（「祇園天王信仰の源流」）によると、「牛頭天王縁起」は朝鮮系の渡来人が運搬したものをもとにして作られたことは確かであろう。時代的には本解「ソニンムクツ」の古伝と推される『三国遺事』所収の「処容郎望海寺縁起」が、鎌倉中期の成立とされる『日本紀』所収の「備後国風土記逸文」に一番近いと言えるが、その趣向・叙述内容からみるかぎり、「牛頭天王縁起」はそれをもとにして作られたとは考えられない。それよりはかえって現在の本解「ソニンムクツ」の方が、日本のものと近似する。そうすると「牛頭天王縁起」は『三国遺事』所収の「処容郎望海寺縁起」に先行する巫覡の祭文が、松前氏の挙げる朝鮮系渡来人によって運ばれ作られたものであろうと想定できると、著者としてはかなり突込んだ見解を述べている。

第四章本解「帝釈クツ」と本地物語「浅間の本地」、神道集「児持山之事」は、一、二三頁、本書全体の約三分の一を占める力のこもった長編論文である。本章は一、本解「帝釈クツ」の伝承 二、本解「帝釈クツ」の諸本と異同 三、高句麗の始祖「東明王・琉璃王神話」と本解「帝釈クツ」 四、本解「帝釈

クツ」と琉球の神の子邂逅型日光感精説話  
五、本解「帝釈クツ」と本地物語「浅間の本  
地」 六、本解「帝釈クツ」と神道集「児持  
山之事」 七、本解「帝釈クツ」と本地物語  
「浅間の本地」関係諸伝本の伝承関係の諸節  
から成っている。とくに本解「帝釈クツ」の  
諸本と異同では、韓国全土から採集された四  
十一例が紹介され、各資料についてモチーフ  
構成の比較・分析・検討がなされており、圧  
巻である。我々は本書によって初めて韓国の  
神の子邂逅型日光感精説話の諸伝承のほぼ全  
体像を知ることが出来たのである。

著者は各節の考察の結果、韓国の本解「帝  
釈クツ」と日本の本地物語「浅間の本地」関  
係諸伝承は、同じく神の子邂逅型日光感精説  
話にその源流を置くものであった。また南島  
のオタカベ「思松金」と本解「帝釈クツ」は  
それぞれ固有性と古態性を保持しているが、  
そのモチーフ構成においてきわめて近似し、  
その叙述表現・趣向においてまで近接してい  
て、両者が緊密な関係にあることが理解され  
る。両者の関係は、日本にもかかわらず本解「帝  
釈クツ」A1型（父子邂逅型）、A2型（夫  
妻再会・父子邂逅型）、B2型（夫妻・母子  
再会型）に近接した巫女祭文である神の子邂

逅型日光感精説話がそれぞれ存在し、それが  
駿河の大神富士浅間社や、児持大明神の末社  
的立場にあった白専馬大明神・駒形権現を祭  
祀する巫現集団に取り込まれ、本地物語「浅  
間の本地」と神道集「児持山之事」の原拠の  
祭文となったと指摘している。

第五章本解「七星クツ」と本地物語「月日  
の本地」は一、本解「七星クツ」の伝承 一、  
本解「七星クツ」の諸本と異同 三、本解  
「七星クツ」と「門前本解」 四、本地物語  
「月日の本地」 五、本解「七星クツ」と本  
地物語「月日の本地」の諸節から成っている。  
考察の結果両者はモチーフ構成のみならず、  
その叙述の趣向においてもきわめて近接する  
ところがあり、緊密な関係にあることが理解  
されるといふ。両者に一致が生じた理由の可  
能性の一つとして考えられるのは、日本にも  
かつて韓国の本解「七星クツ」のような巫現  
の語る祭文が存在し、それが本地物語「月日  
の本地」の原拠となったとするものである。  
本章で注目すべきは、韓国の研究者の多くが  
本解「七星クツ」の話型の一つとしてみてい  
る済州島の「門前本解」について、著者は疑  
問を持ち、それを再婚型の「炭焼長者」に原  
拠を求めていることである。構成モチーフの

分析の結果、「門前本解」から本解「七星ク  
ツ」の継子虐めのモチーフを切り取れば、夫  
婦の離別から始まって最後に主人公が竈神と  
して示現したという、いわゆる男の悲運を主  
題とした再婚型の「炭焼長者」とその叙述が  
一致していることがわかる。現在韓国の昔話  
には夫婦の離別から始まる再婚型の「炭焼長  
者」は見当たらないが、著者によるとかつて韓  
国の本土ばかりでなく済州島にも、この再婚  
型の「炭焼長者」が存在していた。それが巫  
現に取り込まれて現在の「門前本解」の前身  
の祭文を生み出し、本解「七星クツ」と同時  
に伝承されていた。そして本解「七星クツ」  
がある時期に元の「門前本解」と習合して、  
現在のような「門前本解」が形成されたとい  
うのである。

第六章「門前本解」と「炭焼長者」は、一、  
「門前本解」の伝承 二、「門前本解」と本解  
「七星クツ」 三、「門前本解」の諸本と異同  
四、韓国の「炭焼長者」譚の話型と異同の諸  
節から成っている。諸本の分析の結果、「門  
前本解」の原拠となったものは、元来夫婦の  
離婚から始まる竈神の由来譚である再婚型の  
「炭焼長者」であったという。韓国の炭焼長  
者譚は大きく分けて初婚型と再婚型に分類さ

れる。初婚型の場合、親の悲運を語るA型と親の不運を語らないB型に分けられる。また再婚型には冒頭部分に占いのモチーフを含んでいるA型と産神問答のモチーフを含むB型がある。夫婦の離婚から始まる再婚C型は中国と日本には存在するが、現在のところ韓国の昔話には見当たらない。特に日本の場合、再婚C型に属する文献として葦刈系説話が豊富に伝承されている。こうした実態を参考にすれば、韓国にもかつて夫婦の離別から始まる再婚C型の昔話が存在し、それが巫覡に取り入れられ現在のような「門前本解」を生み出したと述べている。

第七章「門前本解」と「釜神事」「葦刈明神事」は、一、「門前本解」に見られる廁神の由来譚 二、「門前本解」と「釜神事」三、「門前本解」と「葦刈明神事」の諸節から成っている。諸伝承を分析・比較した結果、「門前本解」は炭焼長者再婚C型にその原拠が求められるものである。また韓国・済州島の巫覡シンバンが竈神の本地物語であるこの「門前本解」を自らの祭文として吟誦していることなどを勘案すれば、日本にもかつて産神問答型の再婚B型と夫婦の離別から始まる再婚C型の昔話がそれぞれ存在し、それが巫

覡の祭文に取り込まれ、神道集「釜神事」と「葦刈明神事」の原拠の祭文となったと考えられるという。

著者の韓国に於ける炭焼長者再婚型Cの設定については大筋としてその蓋然性を認めるものの、炭焼長者譚の主旨が女の福分であることを想起すると疑問が残らないでもない。韓国本土における再婚型Cの発見が待たれる。

第八章本解「クンサンイクツ」と昔話「絵姿女房」は、巫覡が昔話を取り込んで祭文化した例である。本論は一、本解「クンサンイクツ」の伝承 二、本解「クンサンイクツ」の諸本の異同 三、韓国の昔話「絵姿女房」の話型(一) 四、韓国の昔話「絵姿女房」の話型(二) おわりに一、本解「クンサンイクツ」と絵姿女房「鳥衣A型」の伝承関係からの諸節から成っている。

韓国の絵姿女房は巫覡の本解「クンサンイクツ」として伝承されているものと、昔話として伝承されているものがある。本解「クンサンイクツ」は絵姿のモチーフを含む本解「クンサンイクツA型」と絵姿のモチーフを欠く本解「クンサンイクツB型」がある。また昔話「絵姿女房」の話型には、絵姿のモチ

ーフを含む「鳥衣A型」と絵姿のモチーフを欠く「鳥衣B型」、絵姿女房「田螺女房・鳥衣型」、絵姿女房「田螺女房・難題解決型」の四つが存在している。このなかで本解「クンサンイクツA型」に一番近い話型は絵姿女房「鳥衣A型」である。なぜ巫覡は昔話の「絵姿女房」を自らの祭文として取り込んだのか。その理由として著者は、昔話「絵姿女房」の四つの話型のなかで主人公の旅、遍歴・苦難の要素を最も強く持っているのが絵姿女房の「鳥衣A型」であり、それを巫覡が取り込んでさらに遍歴・苦難を強調して祭文化したものとみている。これは巫覡の成巫過程における遍歴・苦難と関わる問題であり、巫祖祭文の叙述構造とも対応するものであるという。

第九章本解「成造クツ」と「百合若大臣」は、一、本解「成造クツ」の伝承 二、本解「成造クツ」の諸本と異同 三、本解「成造クツ」と韓国の「百合若大臣」系説話 ノギル国正命水 朝鮮時代小説「積成義伝」 韓国仏教説話「釈譜詳節」の「善友太子」 四、日本の「百合若大臣」 五、本解「成造クツ」と「百合若説教」の諸節から成っている。

考察の結果、日本の「百合若説経」と韓国

の本解「成造クツ」の關係は、単に物語の内容・叙述構成の一致に留まらず、同じ巫現によつて伝承される祭文としてその信仰の背景においても密接な関わりを見せている。兩者

は祭の構成によく沿つた祭文としての古態を留めており、今まで紹介された百合若説話などの伝承よりも密接な關係にあることがわかつた。韓国の巫現による本解「成造クツ」は、家を初めて建てた創世神（建築神）の由来譚であり、この祭文が家を新しく建てたときに行われる「成造クツ」巫祭などにおいて機能することを勘案すれば、「百合若説経」において（内裏建の段、鬼神揃神明帳）の章が物語の発端の一番初めに置かれ、結末の（神々勸請之段）の後に（屋敷堅弓打初之段）が設けられているのは、内裏を初めて建てた創世神を迎え送る章として、説経においてはさわめて重要な意味を占めるものであつた。この事実から推測すると、日本にもかつて家の創世神（建築神）の由来を語る韓国の本解「成造クツ」に近似した祭文が存在し、それが九州から杵岐、さらには対馬を往来した唱門師のグループに取り込まれ、主人公百合若夫妻の八幡の神への示現を主張する「百合若説経」の原拠となつたものと考えられる。今

後兩者が具体的にどのように関わつてくるのか、その伝承資料についての探索と検討作業が必要であるという。

以上の如く著者は各章を通して実に詳細かつ緻密に資料を収集・分析し考察を行っているが、物語の分析が中心で本解の形成過程や作者、伝承経路等についての立ち入つた言及はみられない。日本の本地物については福田教授等の説を受けながら、かなり詳細な特定の伝承者の比定を行っているにもかかわらず、韓国側が手薄であるのは資料的制約からであるうか。本解の仏教唱導性の強さは、本地垂迹説によつて神仏鎮座の経緯を説いた本地物語の形成過程ときわめてよく対応する。韓国の本解の始源に関しては仏教の唱導文芸という伝統の上から考えてゆかなければその謎は解けないであらうし、その具体的な様相について解明されなければならない。少なくとも日本においては唱導文芸の担い手として唱門師、盲僧、比丘尼、巫女、勸進聖、修験者等の下級宗教芸人の存在が知られ、それらの実態もかなり詳しく研究されている。韓国でも仏教説話の運搬者として、日本の琵琶法師と同様に全国を行脚した職業的な「銅俗僧」や行脚乞食僧、香徒、居士、琵琶居士、緑化

輩、念仏僧、門僧、歌舞僧などの名が文献にみえているので、彼らが叙事巫歌の形成に大きな役割を果たしたであろうことは当然予想される。また諸説話を収集して仏教と習合のもとに編纂を行なつたであろう、例えば日本の安居院のようなものが存在したか否か、また僧侶と巫現のかかりの実態がどのようなものであつたのか等々、巫俗と仏教の習合の過程の具体的な様相についての研究、言及が必要なのではないだろうか。本書には結論としてこれらの諸点に関する一章をぜひ加えて欲しかった。

尚本書には誤字・誤植が非常に多い。管見に入つただけでも P. 54 巫俗資料（料）、青丘学叢書（青丘学叢）、P. 68 翰南太（本）系、P. 69 P. 129 繫（繫）がり、P. 241 初監察（祭）床、P. 246 玄宮（官）公、P. 277 貴会（公）子、P. 257 尼特（持）、P. 309 むらやま（きみ）の尉、P. 310 四三四（三四）〇星、P. 311 継子（母）の嫁入り、P. 332（柳田国男氏が）『日本昔話集成（名彙）』、P. 35 産押（神）問答型、接（撰）州、P. 356 飯田由（吉）晴、P. 386 満潮（朝）の百官、P. 405 鯨満（万）国、P. 409 祈（祈）願等二十数箇所以上に及ぶ。本書が研究史上きわめて重要な位置を占める書である

だけに、実に惜しまれるところである。

いづれにせよ本書は日韓巫系文学研究史上の金字塔の一つであると言つてよいだろう。この方面の研究にとつて本書は量り知れぬ程多くの寄与をなすものである。著者の長年に

亘る労苦をねぎらうとともに、今後のさらなる研究の発展を心から期待したい。

(三弥井書店 本体九八〇〇円) 平成十三年一月三十一日発行

(よだ・ちほこ／撰南大学)

## 書評

林 晃平著

### 『浦島伝説の研究』

#### 三 浦 佑 之

二十年にもわたる林氏の浦島研究の一端が、書下しの序章を除いて既発表論文二十一本全七章からなるA5判五〇〇頁の大著として姿を見せた。その厳密な文献探索と精密な分析作業をもとにした論述群を前にした私

とのできる浦島伝説は、文学史の指標の役割を果たすことが可能(序章「浦島伝説略史」)な作品である。そして、本書が対象としているのは、その後半部分に相当する。なぜ、中世以降にこだわるのかといえ、おそらく資料がケタ違いに多く、そこに林氏の興味が集

は、敬意と驚嘆を感じるばかりである。扱われている時代でいうと、その全体は、中世(第一―三章)・近世(第四、五章)・近代(第六、七章)に区切ることができる。よく知られている通り、浦島物語は八世紀の日本書紀・風土記・万葉集をはじめ、さまざま

な文献に書き伝えられており、林氏も言うように、「古代から現代まで一貫して見通すこ

#### 中世の浦島太郎

おもに漢文で記述された古代の浦島物語が大きく変容するのは、中世に書かれた御伽草子であるというのは周知のことだろう。そして、林氏の関心もまずはそこに注がれていることは、以下のような目次をみれば了解される。

第一章 浦島太郎誕生以前(第一節 浦島伝説と「古語」の行方 / 第二節

『源氏物語』と浦島伝説)

第二章 浦島太郎誕生の周辺(第一節 歌

学書の浦島伝説 / 第二節 浦島太郎

誕生の諸問題 / 第三節 浦島太郎と

四季)

第三章 所謂御伽草子「浦島太郎」(第一

節 所謂御伽草子「浦島太郎」の諸本

/ 第二節 所謂御伽草子「浦島太郎」

の流布本)

中心は第三章にあり、ここでは御伽草子の諸本の分析をもとにした分類(第一節)と、洪川版御伽文庫を代表とする流布本系諸本の対照表をもとにした比較検討(第二節)がなされ、御伽草子「浦島太郎」が、「多数の補